

【佳作】

約束

米津慧 (三重県 高田中学校 3年生)

近所に、喧嘩をしても、どこか憎めないところがあるという、そんな友人がいた。彼は僕の家から歩いて30秒くらいの所に住んでいて毎日僕は遊びにいった。ある時はせみを捕りにいったり、またある時は「トカゲの墓を作るんだ」とか言って一緒に墓を作ったり。今となってはどれもかけがえない思い出だ。毎日を楽しく送っていた、そんなある日僕が考えもなかったことが起こった。

小学校にあがった年の9月下旬、僕はいつものように彼の家に遊びにいった。帰りがけ彼の80歳をこしたおばあちゃんが、育てているエンドウ豆を持たせてくれた。そして家に向かって歩いている時「ちょっと待て」と呼び止められた。「俺もう10月で転校するんだ。」それは僕にとつて衝撃の告白だった。驚きと同時に「何でもっと早く言ってくれないんだ。」という怒りもわいてきて僕の頭の中はこんがらがっていた。帰ってから家のソファに寝転がり僕は今日あったことをずっと考えていた。僕は彼のために何をしてあげるのが一番なんだろうかと、悩み眠りについていた。

そして翌日、学校で担任の先生から彼が10月いっぱい転校することを告げられた。「冗談じゃない。」と思った。僕は放課後、

彼のためにお別れ会をしようと提案した。彼は少し恥ずかしそうだったけど、クラスのみんなと彼の引越しの前日の日曜日に、近くの児童センターで集まる約束をした。

その日がきた。僕はご飯を食べるとすぐに児童センターへ向かった。そして5分後に彼がきた。それから30分程して5人ぐらいい来た。それで降はいっこうに待っても誰も来なかった。「人が少ないし、もう帰ろっか。」と誰かが言った。彼は待っている間ずっと下を向いていた。

落葉が舞っている。僕は彼と二人で近くの公園に行った。「ごめん。」僕は謝った。引越しちゃうのに何もしてやれなくてごめん、僕は心の底からそう思った。何かを叫びたくなかったが、そうしてしまうと彼がもっと悲しくなる気がして黙っていた。しばらく沈黙がつづいた。「ブランコ乗ろっか。」僕は彼に声をかけた。並んでブランコをこぎながらも何も喋れずにいた。

空があかね色に染まってきた。「もう帰ろっか。」僕たちは歩いて家の方向に向かった。通りを流れる下水道の音が僕の胸に重くのしかかってくる。「えっと」僕は何かを喋ろうと口にした。その時彼がやっと口を開いた。「これ。」彼が渡してくれたのは、一つのポストカードだった。「あなたのどこが好きじゃなくてどこも好き これからもわすれないでね。」と彼の汚い字で書かれていた。

僕は引越してしまう彼に何にもできなかつたのに、彼は僕にサプライズプレゼントをしてくれたのだ。僕は思わず泣きそうになった。「ああ、こうやって僕のことを思ってくれてたんだ。」僕は嬉しかった。これが僕の記憶する最初の嬉し涙だ。

とうとう彼が引越してしまう日がきた。彼は僕の家にきてくれた。「また会おうね。」と二人で約束を交わした。

今、僕は14歳の中学三年生だ。あれから十年近い年月が経った。僕はまだ彼と会うという約束を果たせていない。久し振りに会ってみたい。彼がどんな中学生になったのか話してみたい。

そういえば、この前一つ気づいたことがある。彼のおばあちゃんが僕によくくれたエンドウ豆。実はその花言葉が「約束」だったことだ。

あれ、僕は彼との「約束」を果たしているだろうか。いやほとんど果たしていないような。

一応、僕は今も彼と年賀状のやり取りは続けている。噂にきくと、エンドウ豆をくれた彼のおばあちゃんは、ご存命で、介護施設に入っているそうだ。あの日の思い出は今も僕の心の中に残っている。僕は普段忘れっぽいのだがあの日のことは今でも鮮明によみがえってくるのだ。

今年も彼から年賀状が届くだろう。年賀状に会う約束を書こう。今度こそ約束を破らないように。